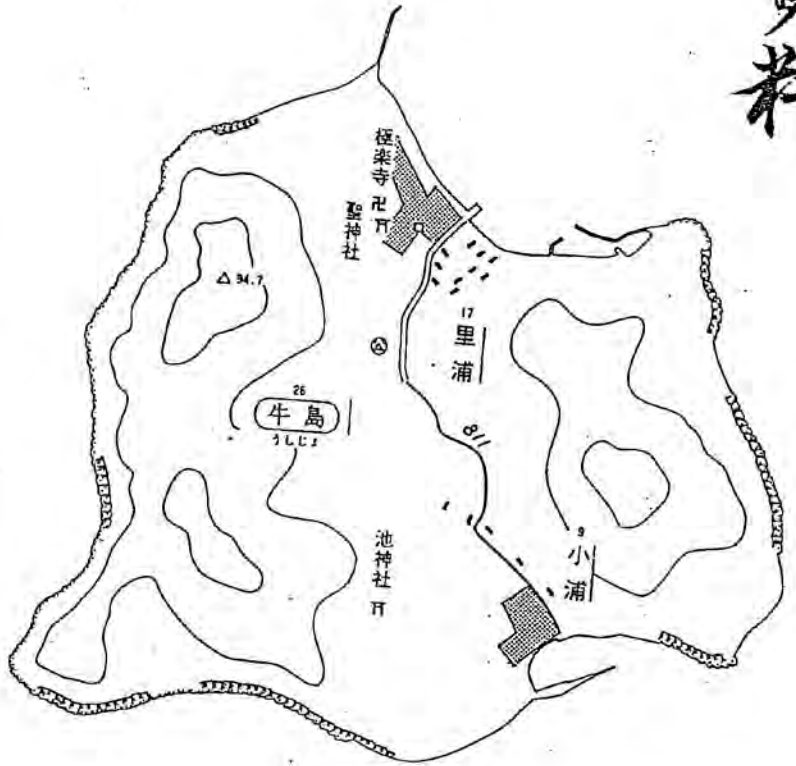


塩飽史談会資料

牛島



平成五年九月拾九日

第九章 塩飽の船持衆

寛文十二年（一六七二）河村瑞賢が幕府の命をうけて、酒田から江戸への西回り海運を開いた時に、塩飽から何程の回船を出したかは明かでないが、これを契機として塩飽には多くの船持衆ができて、海運界に活躍するようになった。⁽¹⁾

貞享四年（一六八七）島支配万年長十郎に指出した書上によると、「島中で加子に出申す者」が三千四百六十人であって、その内二千二百七十三人が「不断船方にまかり出で候」ものであり、千百八十七人が「不断宿に居り申候諸職人・船持・畑作人」であるとしている。また宝永五年（一七〇八）にはご城米船が大小百一艘、その石高は四万二千八十石との記録も残っている。

正徳三年（一七一三）には船の数四百七十二艘あり、その内千五百石積から二百石積のものが百十二艘、二百石から三石までのものが三百六十艘あった。享保六年（一七二一）には四百七十艘の船があって、内千五百石積から二百石積までのものが、百十余艘、二百石積から五石積までのものが三百五十余艘あったと、『塩飽島諸訳手鑑』や『島

第九章 塩飽の船持衆

二六一

第五編 近世の人名

二六二

中集記書』などに記されている。

このように江戸時代中期頃の塩飽島の人々は大部分が回船の船持か、これに乗り組む加子達であった。従って島々は繁昌して、正徳三年（一七一三）の調査によると、

家数 二千二十六戸

人数 一万七百二十三人

男 五千四百六十二人

女 五千二百六十一人

宮数 二十三社

寺数 三十八寺

内 真言宗 三四、天台宗 一、浄土宗 二、山伏 一

となっている。神社・寺院の多いことには驚かされるのであるが、ここに収蔵せられている仏像・仏画・什器なども、重要文化財に指定せられている、本島甲生東光寺の薬師、同泊正覚院の聖観音・不動・毘沙門の諸像を初め優秀な作品が多いことによっても、島の経済の豊かであったことが知れる。

⁽³⁾酒田港の海上沖合に飛島という小島がある。日本海の沖乗航路の停泊地で、享保のころ（一七一六—一七三五）からの客船帳や難破船のとりあつかいをしたときの浦手形が残っている。それによると、江戸時代の中ごろにここへ来ている船は、塩飽の船とくに牛島の船が多かったといっている。

牛島は塩飽の島々の内でも、面積がわずか〇・七一平方キロメートルに過ぎない小島であるにもかかわらず、船持が多かった。

寛文十二年(一六七二)に牛島の南浦(小浦)に、船つなぎ場を築造した。その費用は船持が、持船十石に付一匁二分九厘宛を負担してまかなうこととし、それから後の波止場の修築も船の石数に応じて支出した。これによってその当時の牛島の船持の数、船の石数を知ることができる。

延宝七年(一六七九)に船入の修繕をした時の船持は五十二人で、船の石数は合計四万八千七百五十石であった。一人平均九百四十石に当るから、全部の人が千石船の船主であったといってもよいのである。

それから二十四年後の元禄十六年(一七〇三)に波止場のつくり直しをした時には、千石以上の船持が六人、千石以下のものが十三人いた。さらに二年後宝永二年(一七〇五)に同じく波止場のつくり直しをした時には、四万三千三百五十石の船があり、内千石以上の大船持が九人、千石から七百石までの持主が十一人いた。それから三年後の宝永五年(一七〇八)には四万二千八十石の船がいた。

この多くの牛島の船持衆の内でも特に有名なのは、丸尾五左衛門である。「沖を走るは丸屋の船か、まるにやの字の帆が見える」と歌われたり、「無間の鐘」「珊瑚の杖」などの伝説までも残っている。

丸屋五左衛門は、その先祖は東氏を称し、肥後の武士であったといわれている。五左衛門長雲の時丸尾氏を名乗り、その子の五左衛門重次の時、牛島に来て回船業を始め、重正・正次と三代百五十年間に巨万の富を造って内海の上王とうたわれるようになった。その持船も、延宝七年(一六七九)には一万一千百三十石、元禄十六年(一七〇

第九章 塩飽の船持衆

二六三

第五編 近世の人名

二六四

三)には一万一千二百石、宝永二年(一七〇五)には一万四百石あり、丸あるいはまるにやの字の船印をつけた船は全国どここの港でも見られるまでになった。

菩提寺である牛島の長徳院には、五左衛門が同じ牛島の大船持、長喜屋吉之助・同伝助・同長右衛門・同権兵衛などと共に施入した薬師堂・観音堂・一切経蔵、延宝四年浄厳和尚在銘銅鐘を初め、貴重な仏像・仏具・経典などが残っており、四十一人の船持の名前の記されている貞享元年(一六八四)の奉加額が掲げられている。また各地の神社・仏閣の復興修築に寄進したところも多く、本島の正覚院観音堂の床下の根太に、千石船の舵のみきの使っているのも、今に残っている篤志のあらわれの一つである。

一方この丸尾家の富名を聞いて、諸侯の内には金子の調達を頼みに来たものもあった。

肥後の熊本藩もその一つで、宝永三年(一七〇六)から享保五年(一七二〇)にかけての「預り申す銀子」の証文が四通残っていた。四通の合計銀子は二百二十三貫九百九十六匁で、その当時の米価を一石六十匁として、三千七百三十三石の米相場に相当する巨額である。

正徳五年(一七一五)讃岐の金毘羅大権現に奉納している青銅の釣灯籠に、牛島の十八人、笠島の四人、与島の四人、山西(本島の西部)の四人の船持の名の刻まれているのがある。その三十人の内二十三人が丸尾の姓である。多分丸尾の持船の船頭が丸尾を名乗ったものと思われる。

このように塩飽が繁盛を極めていたのは百五十年ぐらいであって、その後の時勢のうつりかわりは、後章でも述べるように、塩飽の回船を衰えさせていった。

明和二年(一七六五)八月四人(6)の年寄から江戸勘定奉行に差し出した書類の中に、

島々の者、浦稼渡世の儀、先年は回船多くご座候に付、船稼第一につかまつり候えども、段々回船減じ候に付、小魚獵つかまつり候者もご座候。元来小島の儀にご座候えは、島内にて渡世つかまつり難く、男子は十二三歳より他国へまかり越し、回船・小船の加子、または大工職つかまつり、近国へ年分渡世のためまかり出で候。老人妻子ども畑作渡世つかまつり候。

と、

家数 二千四十六軒

人数 九千七百六十七人

内 男 四千九百三十七人

女 四千八百三十人

船数 三百五十一艘

回船 二十五艘 但十八端帆から二十端帆まで

獵船 百二十八艘

小船 百九十八艘

と記している。

また寛政二年(一七九〇)七月に、年寄から大坂川口奉行に出した『塩飽島明細帳』には、

第九章 塩飽の船持衆

第五編 近世の人名

一、島中十島に二十カ浦人家ご座候

家数合 千九百六十九軒

惣人数合 九千六百五十五人

一、船数大小合 三百二十一艘

内 七艘 千百石積より四百石積まで 回船

五十七艘 四百五十石積より三十石積まで 異船

とあって、家数・船数ともに著しく減少していることを示している。

昔時の繁盛振りは失ったというものの、その後も塩飽船持衆の力は大なるものであった。本島の八幡神社の参道にある延宝二年(一六七四)・寛政五年(一七九三)・文化五年(一八〇八)の常夜灯・狛犬・鳥居、また正覚院への登り道の文化九年(一八一二)・文政八年(一八二五)・安政四年(一八五七)の常夜灯籠には、これらを寄進した多くの船持衆の姓名が刻まれており、万延元年(一八六〇)に建てられた八幡神社参道入口の灯籠も、一基は氏子中が、一基は十二人の船持衆が奉納している。摂津の住吉神社に宝暦六年(一七五六)に塩飽回船中が献納した永代常夜の大灯籠が二基ある。それを文久三年(一八六三)に一基は塩飽島中が、一基は広島立石浦の尾上吉五郎が世話人となって塩飽の船持十七人が修葺している。また立石の八幡神社の鳥居・玉垣には多くの船持衆の名が刻まれていて、後後まで活動を続けて、信仰心の厚かったことと、その富の偉大であったことを示している。

12 聖徳太子堂 寛政9年(1797) 惣浦職人

尚、浄厳大和尚が延宝6年(1678) 船持衆の請に応じてこの寺に 来り、35日の間説法し、商船等のために随求陀羅尼經を講じ、梓行して船中の守となさしめた等の関係によつて、浄厳大和尚の遺物、十二天の種子、書簡、二十五条袈裟、茶器、鉄鉢等が伝わり、その他に牛島船持衆の正徳2年(1712) 辰9月吉祥日の廻船会合控帳、船入諸事之帳、法加額面等貴重な史料が残っている。

寺の後の山には丸屋、長喜屋、住職累代の墓がある。

(真木記)

97 延宝5年浄厳大和尚在銘梵鐘

工芸 1口 昭和31. 6. 4
本島町 牛島 極楽寺

この梵鐘は、延宝5年(1677)に住持宥誓の代に、牛島の大船持長喜屋宗心が亡父母宗円、妙愛の冥福と一家一族の二世安楽を祈願するために寄進したものである。泉州堺の冶工菊波出雲藤原家次が铸造し、銘は時の大徳浄厳大和尚が書いている。

浄厳大和尚は、関東真言律の総本寺江戸湯島靈雲寺の開山で、字は覚彦、姓は上田、寛永16年(1639)11月23日河内錦部郡鬼住村に生れ、元禄15年(1702)6月27日64歳にて江戸で長逝し、谷中の妙極院に葬った。剃度の弟子436人、灌頂を受くるもの167人、菩薩戒を受くるもの15,000余人、また悉曇三密鈔、法華冠註等15部60巻を梓行し、諸等秘訣等300余巻を謄写するなど、当時学徳の最も優れた名僧であった。高松藩主松平頼重の渴仰を受けて讃岐に遊び、その間牛島の大船持丸屋、長喜屋等の招請によって牛島に 来り、商船等のために經を講じたり、また梓行して船中の守となさしめるなどした。極楽寺には浄厳大和尚の遺物の数々が藏してある。

長喜屋は宗心信男の後も子伝助、権兵衛、長兵衛3家に別れ、いずれも丸尾五左衛門と並んでの大船持となって栄えた。

丸尾五左衛門にからまる「無限の鐘」の伝説は、この鐘にとよせてできたものと思われる。(真木記)

(真木記)

96

極 楽 寺

史跡 昭和31. 6. 4
本島町 牛島

牛頭山長徳院といひ真言宗に属している。江戸中期に丸屋、長喜屋など北國廻船に従事した牛島船持衆が大繁盛を極めたときに創立されたもので、この寺の経営の状況によつて、牛島船持の盛衰をうかがうことができる。

その盛時をしのぶ主なる建造物と建造年月、寄進者名を挙げて見ると、

1 薬師堂 三間 寛文12年(1672)惣旦那中

本尊薬師如来は、行基開眼の尊体で、もと多度郡鴨の庄道隆寺にあったものを、延喜6年(906)の春靈夢によってこの寺に移したものと伝えられている。

2 鐘楼 延宝6年(1678)長喜屋宗心子息故山権兵衛正孟修復
万延1年(1860)長喜屋故山権兵衛孟清

3 梵鐘(浄厳在銘) 延宝5年(1677)長喜屋故山宗心

4 観音堂 三間 延宝中(1673~1680) 惣浦中

本尊聖観音立像は平安期の優秀作

5 観音堂額 元禄16年(1703)長喜屋長右衛門

6 観音堂石段 宝永年中(1704~1710) 丸尾五左衛門

7 観音堂香篋 京都泉涌寺天圭

8 経蔵 二間 元禄6年(1693) 丸尾五左衛門重次

9 一切経5930巻 丸尾五左衛門重次

10 宗窓印塔 延宝年中(1673~1680)丸尾五左衛門重次

11 天神社再興 宝永2年(1705)丸尾五左衛門

かつて航海したりしもの

驚異して彼の楼門を海より眺めたるなるべし。

広き石畳の造船台も

今は土をかぶりて芋畑と化し、

廃墟のひとつところに

にれ おおきひともと
榎の大木一本生えたり。

かの下にゆけば老翁一人、

むしろをひろげて秋の日に

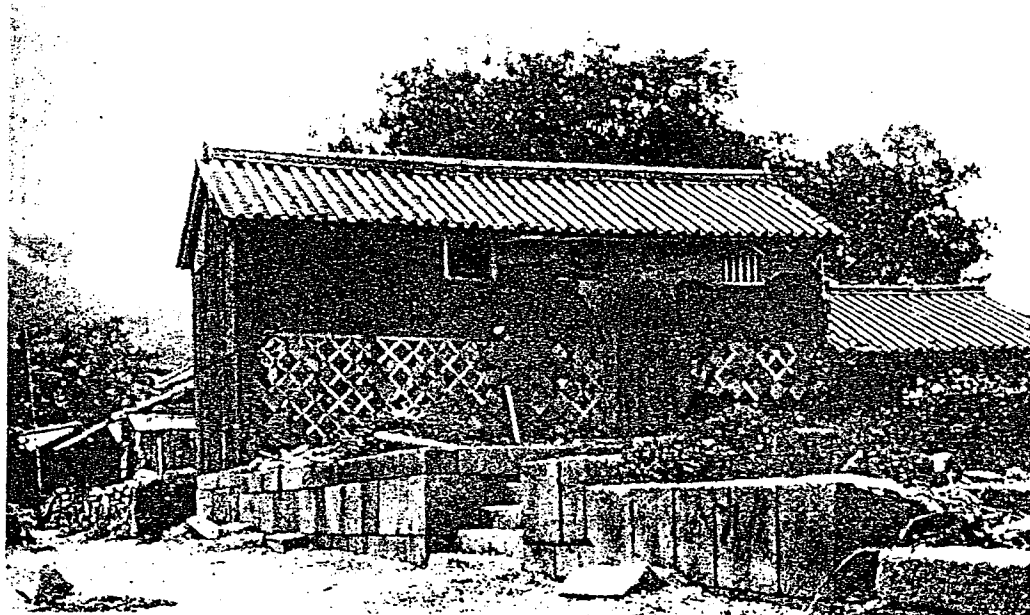
大根を乾し余念なし。

われ佇立して心いたみ

この孤島に榮えすぎたる

海の丈夫をくりがえし思うなり。

(真木記)



丸尾五左衛門屋敷跡及船釘場

98

丸尾五左衛門屋敷跡

史跡 昭和31.6.1

本島町牛島190

牛島里浦の中央、海岸に面した屋敷で面積30アール余、今は畑となっているが大きな切石で築いた石垣と正門の石段に、昔の盛時をしのぶことができる。

丸尾家はもと東氏を称し、肥後の浪人であったといわれているが、五左衛門長雲の時より丸尾氏を名乗り、その子の五左衛門重次(宗運)が寛永の頃(1630頃)牛島に来て廻船業に従事し、かの寛文12年(1672)西廻り航路が開かれて後は、北は北海道、奥州、南は九州等にある幕府の官米、諸侯の城米を始め、各地の物産を江戸、大坂に廻送し、長喜屋と共に牛島船持衆の長老として豪華をうたわれた。その全盛期は寛文から宝暦にかけての重次、重正、正次の約百年間であった。代々の墓は極楽寺の後の山の墓地にある。

肥後の熊本藩に調達した銀子の借用証文、寄進建立した一切経並に経蔵、その他盛時をしのぶ遺物が数々残っている。また

“沖を走るや丸屋の舟か

まるでやの字の帆が見える”

の唄や、「いろは船」「無限の鐘」などの伝説も伝えられている。

中河与一「牛島風景」の一節

われひと日渡り行きて

島の廃墟に立ち

昔て栄えたりし礎に心つきず。

こゝに海の潮者、丸尾五左衛門いたりしという。

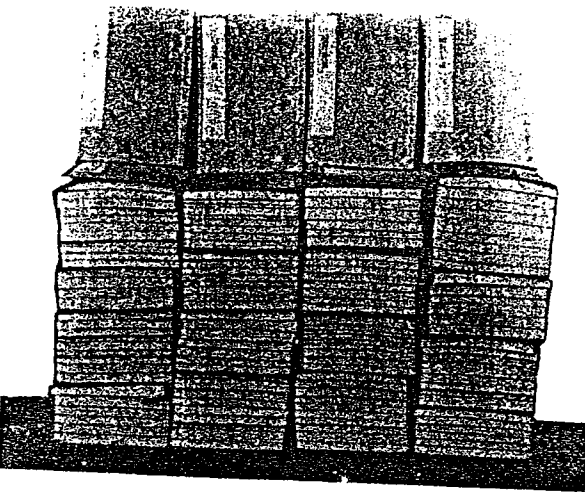
されど彼れが権勢の跡には

今、とうがらし、あずき、除虫菊のみ繁りたり。

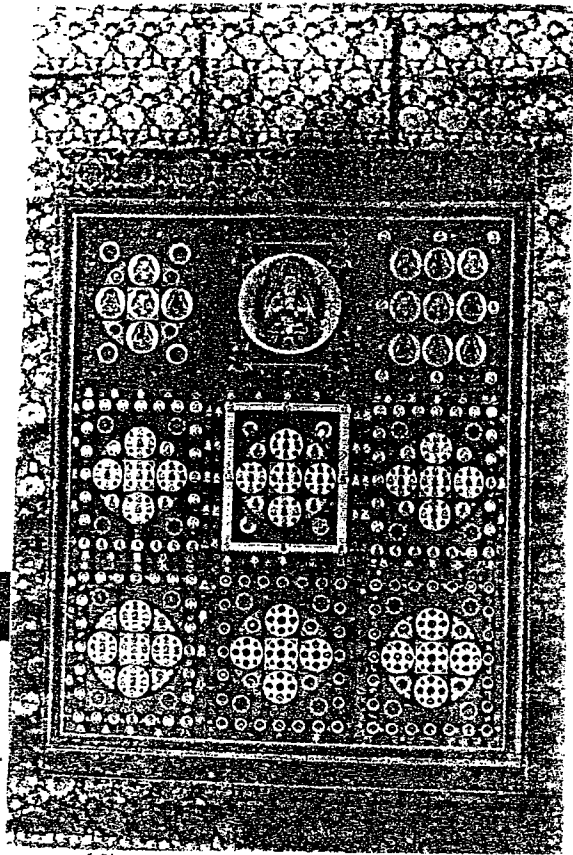
荒れ朽ちた釘倉一つ

海に向い残れる大いなる石の階段

そこに聳えたりし高樓の姿思はゆ。



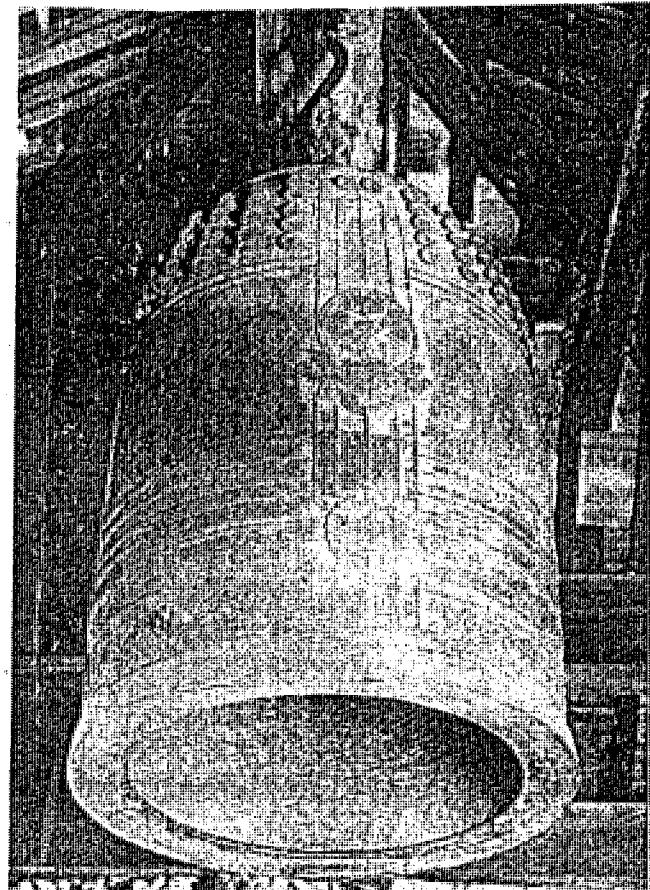
(長島長島寺) 一可主丸尼五在齋明



(長島長島院) 淨嚴和尚遺物曼陀羅



牛島長德院觀音堂



牛島長德院鐘



寶蓋冠
大正四年



通力冠
大正四年

丸

朝日丸
大正四年

丸

盛徳丸
大正七年

塩飽回船の箱印



大正四年
大正七年
大正四年
大正四年
大正四年

孫傳の事

大正七年三月九日
村山

右の盛徳丸は、
大正七年三月九日
村山
大正七年三月九日
村山
大正七年三月九日
村山

細川備前守文

塩飽の伝説

◆ 牛島・丸尾五左衛門 「さんごの杖」

牛島の丸尾五左衛門はたいへんな分限者でした。

昔のこと、五左衛門の家で祝い事があり、大阪の鴻池という豪商がまねかれた。大きな広間に、数えきれないほどの膳が並び、海の幸、山の幸が山のように盛ってあった。宴も三日三晩つづき、大変なもてなしでした。お土産には珍しい茶器や高価な壺などお金ではなかなか買えないような品ばかりでした。

「さすがに牛島の五左衛門じゃわい」

とおもいましたが、それでも、まだまだわしの方が財産は多いわいと内心思いながら舟着場までやってきたときでした。あわてて五左衛門の家まで引き返し、

「しもた！忘れ物をしました。我が家で代々家宝としとります大切なさんごの杖、おまへんか？」

と真っ青な顔で駆け込んできました。

「それはおこまりでしょう」

とすました顔で奥の方から、山ほどのさんごの杖を抱えて出てきました。

「さあ、どうぞ捜して下さい」

これには豪商とうたわれた鴻池さんもすっかり自信を無くして、すぐすご帰ったということです。

塩飽の伝説

◆ 牛島・丸尾五左衛門 「無限の鐘」 ◆

本島のすぐ南に、周囲4.2kmの牛島という小さな島がある。この島に丸尾五左衛門というたいそうな船持ちがいた。回船業を商いにして、日本中の海を航海していた。

「沖を走るは丸尾の船か、丸にやの字の帆が見える。」と、うたに唄われるほどたくさんの船を持っていた。

五左衛門がこれだけの船を持つようになったのは、極楽寺にある無限の鐘（鳴らずの鐘）をついたからだ、といわれている。無限の鐘には、

「鐘をつく者は、たちまち巨万の富を極め、人生無上の福にめぐまれる。だが栄華のあとには、必ず災難が待ち受け、生きながらの無限の地獄におちる。」という恐ろしい言い伝えがあった。

ところが、五左衛門はこの鐘をついてしまった。無気味な鐘の音色はいんいんと響き渡って、島の人達は皆ふるえあがったという。

ある年の正月、五左衛門は自分の持ち船を調べるため、瀬戸内海に船を並べさせた。牛島から大槌島まで並んだ船を山の上から数え始めたが、半分も数えないうちに日が西に傾きかけました。

五左衛門は、持っていた金の扇で「お日様、わたしが船を数え終わるまでしばらく待ってくだされ。」と、日をお招き返した。

そこで、ようよう船を数え終わることが出来た。

だが、船だま様やお日様の怒りにふれて、その夜のうちに大しけになり、船は一そう残らず沈み、五左衛門は没落して貧乏になってしまったそうです。